

博物館ときのこ30年 – 房総のきのこ相の特徴

吹 春 俊 光

私が中央博物館の準備室に、菌類担当としてはいったのは1987年です。2年間の準備室のあと、1989年に中央博がオープンし、その間に中央博の建物も完成しました。建物の中はほぼ空洞で、準備室の時代から、収蔵庫をつくり、標本棚をそろえ、備品もそろえ、房総の菌類相の調査がスタートしました。生態園は、いったん裸地となったところへの植林から始まったのです。

中央博がスタートしたときのスローガンは、博物館は県民の「蔵」であり、中央博生物系職員は、県内生息生物の、いわば住民台帳をつくるのが目標であり、房総の自然と歴史の、過去と未来を見渡す展望台となること、中央博の使命であると、当時の副館長から訓示を受けたのでした。

私が担当した、きのこ（大型菌類）の県内における調査は、1954年の東大演習林の硬質菌目録が、県内における唯一目録らしいもので、証拠標本をもとにした目録という意味では、ほぼ白紙の状態から始まりました。また1991年には千葉菌類談話会が発足しました。最初、談話会の会員は皆シロウト集団だったのですが、現在では皆立派なきのこ通となり、会員数は350人を超えています。その談話会とともに、房総のきのこ標本を集めていきました。

そして約30年、収蔵庫に収集した標本群は約3万点をこえ、そのうち約7割が県内産です。生態園や演習林をはじめ、千葉市や市原市、その他いくつかの県内各地の目録の他、千葉県菌類誌という目録(1-6)を継続して作成し、現在では695種(+8変種、4品種)合計707種類が千葉県産の大型菌類として知られるようになりました。今では千葉県は日本の中でもよく菌類相が調査されている数少ない県の一つです。それは、やはり標本を蓄積することのできる中央博がつくられたからといえるでしょう。そして様々な千葉県産菌類目録をつくることによって、房総の菌類相の全容と特徴が浮かび上がってきました。その特徴とは…

【房総のきのこ相の特徴】

房総に見られるきのこ類は次の七つの特徴として分けることができます。

○シイ・カシ林のきのこ

日本でも最も標高の低い県として知られる千葉県の潜在的な植生は、ブナ科のシイ・カシ林です。このシ

イ・カシ林は、ヒマラヤの中腹から中国南部、熱帯島嶼の山岳部、そして台湾・沖縄を経て西日本から千葉県を経て阿武隈山地付近まで広がっています。中尾佐助が「照葉樹林」と名付けた森で、中尾が1950年代にマナスル登頂ルートを策定するためヒマラヤ中腹であるネパールへ入ったときに発見したのです。「目の前に黒々と広がる森はシイ・カシの森で東アジア植生の中核構造である」と表現しました。この東アジアに広がるシイ・カシ類の森は菌類(きのこ類)と共進化し、地球上の他の地域にみられない固有の外生菌根菌類相をもっています。千葉県のシイ・カシ林やコナラ林で普通に見られるチャオニテングタケ(中国南部、沖縄、千葉)、カブラテングタケ(ニューギニア、マレーシア、中国南部、千葉)、オニフウセンタケ(ニューギニア、西日本、千葉)等のきのこは、千葉県の自然が遠くヒマラヤやマレー半島まで広がりがつなっていることを教えてくれます。他にもハイカグラテングタケ、ベニイグチ、ルリハツタケ、ヘビキノコモドキなどがあります。これらのきのこ類は、中央博のきのこ調査の中で、はじめて房総での分布が明らかになっていったものです。またこれまで何度も申し上げていることですが、東大の演習林の荒極沢のシイ・カシ林で2000年10月2日に世界で1回だけ発生し新種記載されたシロオビテングタケも、同様の分布域をもっていたと考えられ、世界の中でも房総半島にだけ生き残ったものと考えられるのです。房総の自然の貴重さを特徴づける象徴的な種類です。

千葉県の自然は平凡であると言われがちなのですが、丁寧に調べてみると、房総の自然が、なかなか味わい深いことがわかってきます。これも中央博がローカルにこだわりながら30年間活動してきた成果といえるでしょう。

○マツ林のきのこ

房総で見られるアカマツやクロマツのマツ林は、先へのべたシイ・カシ林が伐採されたあと生えてきた二次林です。放っておけば50年から100年たつとシイ・カシ林にもどります。この不安定な二次林であるマツ林が、江戸時代をとおして里山林として安定的に維持管理されてきたのが房総の里山の特徴です。現在残されている明治時代の絵葉書や江戸時代の浮世絵などをみても、房総半島のほとんどがマツ林に覆われている

ことがわかります。このマツ林の管理方法は、下草刈りをして、落ち葉などの有機物を収奪し続ける典型的な里山の管理方法です。しかし、この方法はきのこを通して森林植生を管理する方法でもあるのです。すなわち、有機物を収奪することにより、林床が貧栄養に保たれ、貧栄養環境を好む外生菌根菌（きのこ類）が生き残ります。これらの貧栄養好ききのこ類はマツ類と共生する菌根菌類で、結果的にマツ類が元気に育つ環境となるのです。

現在では関東の西はコナラ林、東の房総はマツ林として江戸時代から明治にかけて維持されてきたということが明らかにされています（白井豊「明治10年代における下総台地西部の土地利用と薪炭生産—迅速測図と「偵察録」の分析を通して」2002）。マツ材やマツ炭は燃料として江戸で歓迎されたため、二次林として生えてきたマツ類を残し、またマツを植えて、里山をマツ林として育ててきたのです。

その結果、マツ類と共生するハツタケ、アミタケ、ショウロなどの食用きのこ類が身近な里山に発生します。それらはすなわち、房総の人が好む食用きのこでもあるのです。房総の人の味覚は、何百年も続いてきたマツ林の環境に支配されてきたといえるでしょう。

○イヌシデ・コナラ林のきのこ

里山のもう一つの管理方法は、コナラ林とすることです。マツ林と同様、下草刈りと有機物収奪という方法で、不安定な二次林であるコナラ林は、安定的に維持されます。どちらの林も30年程度のサイクルで伐採され燃料とされる林です。コナラの雑木林には、タマゴタケやヤマドリタケモドキなどをはじめ、コウタケ、ウラベニホテイシメジ、バカマツタケ、ニセマツタケなど豊富で多様な美味食用きのこが発生します。現在でも、房総における、きのこ狩り人気スポット林です。

房総で見られるコナラ林の特徴としては、イヌシデが混じることです。その結果、房総の雑木林には、イヌシデと共生する、ヒロハシデチチタケ、スミゾメヤマイグチが見られることが房総のコナラの里山林を著しい特徴といえます。このことも、中央博の30年間の活動で判明したことです。

○モミ林のきのこ

モミは、他のブナ科やマツ類とは全く異なる外生菌根菌（きのこ類）と共生します。房総の低い尾根筋に残るモミ林に発生する大型のモミタケは、食用として珍重されています。アカモミタケ、ヒメサクラシメジ、ウスタケなど、他の林にはみられないモミ林独特のきのこも房総の山のきのこの特徴といえます。

○熱帯性のきのこ

熱帯性の光るきのことして有名なアミヒカリタケは中央博の準備室時代、1987年7月28日に東京湾の浮島で採集されました。同様に光るヤコウタケは1989年7月8日に東大の演習林内ではじめて採集されました。その後、南房総各地で、これらの光るきのこが採集されています。他にも熱帯性のニオウシメジなどが見られます。これらの熱帯性のきのこが見られるのも房総のきのこ相の特徴です。

○自然海岸のきのこ

房総半島は、内房・外房を海にかこまれ、かつては自然な砂浜海岸が広くみられてきました。そのような砂浜環境にも独特のきのこがみられます。ウネミケンボウズタケ、ナガエノホコリタケ、コナガエノアカカゴタケ、スナジクズタケ、スナヤマチャワンタケなど。現在では自然な砂浜海岸はスポット的にしか残されていませんが、そんなところに、かつての美しい自然な砂浜海岸に見られたきのこ類が生息しています。これら砂浜の自然な海岸に見られるきのこ類も、房総のきのこ相を特徴づけています。

○外来種

外来種を特定するには、元々どんな種類がその地域に分布していたのかという、長期にわたる記録がないと判定できません。しかし中央博の活動期間である約30年という短い間にも、劇的に分布が広がったきのこがあります。オオシロカラカサタケというきのこは、元々熱帯から亜熱帯に分布する大型の毒きのこだったのですが、1991年に館山市で初めて確認されたあと、2000年に千葉市内でも発見され、現在では県内各地で広く普通に見られるきのことなりました。地球温暖化とともに北上しているきのこことされており、外来種とってよいのかもしれませんが、他にもこの30年間に明らかに目立って発生が増えているものに、ウスキテングタケがあります。よく調べられていないきのこ類ですが、やはり様々な要因で、増えたり、あるいは減ったりしている種類もあるのかもしれませんが。

中央博の約30年間の資料収集活動の成果として、房総のきのこ相の特徴がうかがいあがってきました。私たちは、身近な生き物を通して、我々が暮らしてきた、また暮らしている郷土の自然の特徴を知ることができます。そして将来、われわれが住む身近な環境に、私たちはどんな生き物と共存していくべきなのか、これからも県民の皆さんと考えていきたいとおもっています。

(植物学研究所)